

# Newsletter

AUGUST 2002

http://www.aack.or.jp

## 目次

●特集 AACKの行くべき道	A12	AACKの今後の道	藤本 栄之助……1
●特集 言いたい放題・批判	B1	これでよいのかAACK	北村 泰一……2
●言わせてくれエ——反論——		カンペンチンとメイリーの発想について	山口 克……9
山口と平井の腐れ縁		平井 一正……11	
●【臨時特集】内外山行紀行文 その1		クリチェフスカヤ紀行	岩瀬時郎氏に捧ぐ 曾根原 恵夫……13
●理事会議事録		……17	
●お知らせ		登山探検文献センターの行方	編集子（上尾庄一郎談）……19
		西堀生誕百年事業	編集子（近藤 良夫談）……19
		南極、サイエンス・探検の歴史ツア—	北村 泰一……19
●編集後記		……20	

## 【特集】AACKの行くべき道

### A12 AACKの今後の道

藤本 栄之助（理化 一九六〇卒）

標題のAACKの今後の進むべき行方を論ずる前に、今ほど日本と言う国が進む方向を見失い彷徨っている時期はないことを、先ず意識しておくべきである。

二十世紀は帝国が崩壊した時代と定義づける評論家が多い中で、新たにアメリカという強大な新帝国が出現し、自分のまさにひとりよがりとも言うべき規範で世界中を牛耳るうとしていたので、至る所に歪みを創り出し、矛盾を噴出してきた。それが世界的不況の兆しであり、悲惨なテロの発生であり、それに対する報復戦争の誘発である。

二十世紀後半の暗い世相の中で、常に心ある若者たちの精神的支柱として活躍してきた本多勝一氏でさえ、無差別テロとそれへの報復である無差別戦争を見て、人類は滅亡の坂道をころがり落ち始めた絶望的である。

日本は先の半世紀の間に、政治経済活動において常にアメリカの強い

引力を受けてきたから、今やアメリカの生き方の規範に取り込まれてしまい、その矛盾の中にもろに揉みくちゃにされていて、泥沼から抜け出すこともできなければ、況や自ら改革することなどまったくできない状況である。

こんな時はどうするのか。ひとつは混迷する状況を改革するために革命に身を投じるか、または混乱から身を遠ざけて濁世を冷やかに見下しながら文化創出に精を出すかである。

どちらが正しく、尊いことかは個人の生き方に係わることだから、ここでは議論の対象にはしないが、AACK創立当時の今西錦司や西堀栄三郎の心境は後者に傾いていたのはなかつたか。

あの当時、日本全体が軍国主義に傾斜し、奈落の底に引きずり込まれて行った時、彼らはヒマラヤの処女峰カプルーを目指し、厳冬の白頭山でポーラー・メソッドを試行し、地図のない大興安嶺の奥地に踏み入っていたのである。彼らこそが軍国主義から身を離し、最も文化的なパイオニア・ワークという行動を選んだ、心ある若者たちに夢を与えたのである。

今こそ、AACKはアメリカ式規範から身を遠ざけ、日本の行方を示

さない政治家や教育者、さらに現状を批判はするが具体的にリーダーシップをとらないジャーナリズムに代わって、次世代を担う若者たちに夢を与える義務があると、私は考える。そのため、定款変更が必要であれば、変更すればいい。七十年間も定款変更もせず、ここまで同じことをしてきた方がおかしいのである。

では、具体的にAACKは何をなすべきなのか、それは地理的な空白が殆どなくなってしまう現代において、パイオニア・ワークは如何にあるべきかというテーマに繋がるものであり難しい問題ではあるが、人間の叡智を絞って考えなければならぬ課題でもある。

AACKには、過去のパイオニア・ワークで貯えた貴重なノウハウが財産としてあり、また企画力と組織力は今なお健在であるし、ネームバリューもある筈である。

このように恵まれた社団法人であるAACKは、アメリカ的規範では解決できない現世界の混乱を救うような新しいパイオニア・ワークに挑戦すべきであり、それがAACKに与えられた使命ではないか。

パスカルは彼の名著「パンセ」の中で、こう言っている。「人間は偉大である。なぜならば、人間は自分が悲惨であることを知っているからである」

人間が人間たる所以は、自分ばかりでなく、他人もまた悲惨であることを意識できるからである。

テレビに映し出され、新聞写真に報道され

るアフガニスタンの荒涼たる風景や人々の姿は見る人の心を引き裂く。しかし、ムガール帝国の創始者バーブルが政治と軍事活動の拠点としたこのカブールは、春になればカラム山脈から流れ出る雪解け水が清流となつて近郊を流れ、花がいつせいに咲き出し、緑の美しい土地だったという。その緑の楽園が何故あのような殺伐とした情景になったのか。

十九世紀になって、大英帝国に侵食され、ロシアの南下政策に蹂躪され、イギリスの三C政策とドイツの三B政策に挟み撃ちにされ、瞬く間に害虫に食い荒らされた跡の荒野に成り果てたのであろう。

こういう国に育つ人間は、ペルシャ帝国とモンゴル帝国の遺伝子をその体内に宿しているがゆえに、誇りと正義感に裏付けられた国土奪還の聖戦意識が蘇ってくるのは当然である。彼らの聖戦意識がテロリズムという手段を採らなくてもすむような支援の仕方はないものか、AACKの活動テーマのひとつに取り上げてもらいたいのである。

日本人は古来、一瞬の美しさを捉え、それを詩歌に歌い、音曲に奏で、文学に綴って世界に類のない文化を創ってきた。その日本の文化の中心である京都に拠点を置くAACKは、アメリカ的規範で報復爆撃を蛮行するのとは違った方法で、テロリズムの撲滅に寄与できるのではないか。

アメリカが何千何万発の大型爆弾を落とすよりも、バーブル時代のように、カラムの雪解け水をアフガニスタンの国土に引き廻

らし、緑の沃野に戻すほうが、はるかに彼らを貧困と無知から開放し、テロリズムを終焉させるに効果があるはずである。

私の小さな願いが、AACKのメンバーの議論を呼び覚まし、新しいパイオニア・ワークの始まりとなつて、この暗い世相に絶望している多くの若者たちへ夢を送るきっかけになることを、切に願うものである。

## 特集 言いたい放題・批判

### B1 これだよいいのかAACK

北村 泰一(理地物 一九五四卒)

#### 一 私の立場

私は三十年前、正確には一九六八年に福岡の九州大学へ赴任した。その頃、チョゴリザ(七六五四メートル、一九八五)、ノシヤク(七四九二メートル、一九六〇)、サルトロカ(七七四二メートル、一九六二)が成功裏におわり、更に将来の発展に向かって準備がなされていて、いわばAACKの黄金時代を迎えようとしていた。

当時から十年まえ、私は西堀さんの越冬隊にもぐりこんだ(一九五六、五八)。参加したというより、『もぐりこんだ』という方が近い。その実態は本AACKニューズレター#二十(南極を夢みた頃)、#二十二(一澤

オヤジさんの思い出)に一部書いてある。

九大に移ると、その教授・助教には京大出身者、東大出身者が多いことに気がついた。議論の度に、それぞれが出身校でのことを引き合いに出す。やれ京大ではどうか、東大ではどうかだったとか。私はそれを醜いと感じた。ここは九大である。実家がどこであれ、九大という新天地だ。それぞれが、実家のことを引き合いにだしてどうするか、と。

だから、私は京大の出身研究室も、AACKも、前任の同志社大学のことも忘れることにした。AACKには優秀な人材が揃っている。なにも、遠い福岡からゴチャゴチャいうことはない。それに、九州は九州である。自分だけでもやりたいことは出来るだろう。そう考えて、人跡まれな地域を(南極・北極・アラスカ・カナダのみならず、赤道開発途上国(パラオ、ペルー、ブラジル、アフリカ(カメルーン)、インド、タイなど)を中心に、全世界の十ヶ国以上の奥地(アマゾンとかサハラ砂漠とか)を歩いた。初期には、オーロラを常道どおり南極北極から研究していたが、世界中から南極北極でのオーロラ研究が集中するに及んで、テーマを変えて、オーロラを極地からでなく、赤道から追求することとした。だが、極域の清潔さにくらべて、赤道地域では高温多湿や不潔さに悩まされた。落ちてくるヒルやテントに入り込むサソリに大騒ぎを演じたが、そんなところへ世界の研究者(ライバル)はこない。独断場である。京大山岳部やAACKの経験が、とんだ

ところで役にたった。

数年前、思いがけず『AACKニュースレターの編集長』の声がかかった。AACKのことは忘れたから、とその時は固辞したが、二年前、再び声がかかった。こんどはいけない。さあどうしよう。三十年の空白をどうしようか……。

その内に、このような仕事を現役の忙しい人にせよと言うのは気の毒だ。定年退職者がそれをカバーするのがよいのではないかと考えるようになった。私は九州大学を7年前に定年退職した。

しかし、三十年の間に人脈は切れていた。とくに、若い世代との交流はない。彼らが何を考え、現在がどういいう情勢かは全くわからない。『人材のことなら援ける。インターネット時代だから、京都にいても福岡にいても同じだ』という言葉に、とうとう私は決心した。少し様子がわかってみると、AACKの内部のことで、いろいろ気になることが目に映りだした。だが、それらは、それぞれ理由があつてそうなっているのかも知れないが、私はその詳しい事情までは知らない。今後私自身がいろいろなことを知るにつけて、ここで書くような疑問や事柄への疑問は霧散するのかも知れないが、まず、気になったことを述べたい。

## 二 AACK新入会員数の推移

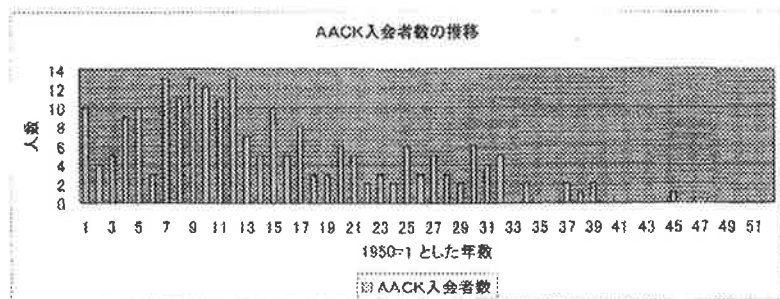
(一九五〇年から二〇〇〇年まで 第一図)  
親しい友人に、私の三十年間の空白の間の

『AACK会員数の推移』を尋ねてみた。若い会員が減っているように思えたからだ。『そうだ』とすぐに答えは返ってきたものの、数字とかグラフとかは示されなかった。

誰でも、こんなことは頭の中では理解しているが、さてとなると、グラフも表も無いようだった。私は理科系(理学部地球物理)の人間だ。『感じ』だけでは満足できない。グラフや数値で理解したい。

本号の山口克氏の文『カンペンチンとメイリー』の発想について』

の中でも、AACKが老化していることが指摘してあつた。ということとは、今まで、AAACK老化論は、各自心の中では理解していたに違いなが、数字化したり、グラフ化したり、あるいは表だつて議論した



第1図 京大山岳部から毎年AACKにはいる、新入AACK会員数(途中退部者や遭難者は除く)の一九五〇年からの五十一年間の推移

ことはないのではないか、と思われた。

私は勇気づけられた。こんなこと、とつくの昔にやられていたのではないかと思つていたので。

幸い、「笹ヶ峰会名簿」というものがあつた。そこには、京大山岳部の新入部員数や、中途退部者の名前、死亡者の氏名などがあつた。これと、毎年発行されるAACCK会員名簿を較べた。

AACCK会員は、京大山岳部出身者だけで成り立っているのではない。しかし、京大山岳部出身者が、全体の九二%以上も占めているので、AACCK会員数の増減は、京大山岳部員の動向が支配すると考えてよい。

まずは、京大山岳部から、毎年AACCKに入会する会員数の五十一年間の推移（一九五〇年～二〇〇一年）を見ていただきたい。以下の各図で、横軸には、「年」の絶対値であらわさず、一九五〇年からの年数であらわした。これは特に意味はない。技術的な問題だけのことである。名簿には一九四六年からのデータがあつたが、わかり易いように、一九五〇年から五十一年間を図にした。以下の議論には、一人や二人の数え誤りはあるかもしれないが、大勢には誤りはない筈である。

重ねて断るが、この統計は、京大山岳部から毎年AACCKへ入る入会者のみを対象としている。京大山岳部員以外の入会者のデータは公表されていないので除外してある。

第一図で、横軸の十七年（一九六六）ころまでは、AACCKは毎年五名～十名程度の新人

人を迎えていたのに、一九六七年（十八年）ころ以後は暫減しはじめ、三十三年頃（二九八二）には、新入会員がゼロとなり、以後、新入会員がゼロの年が次第に多くなっている。

特に三十九年（一九八八）を最後として、以後の十一年間にたった一人の入会者のみで、AACCK新入会員数は「毎年、殆どゼロ」という年が続いている。

十一年間にたった一人のAACCK新入会員というのは如何にも異常であるし、寂しい。これでは、AACCKはどんどん老齢化してしまふ。現に私は七十一歳である。かつて、AACCKの黄金時代を飾った人々もみな七十歳前後で、当時の最若手でさえも五十歳台となつていく。これでは、AACCKは自然消滅しか道は残されていないのではないか。

### 三 京大山岳部員の数の推移（第二図）

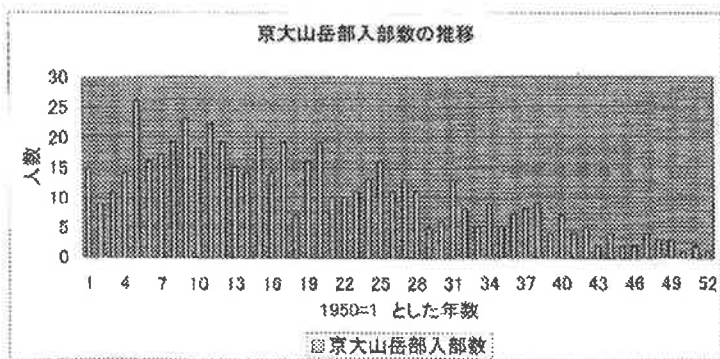
AACCKへ入会する京大山岳部員の数は減つたが、それは、京大山岳部員数が減つたからだという。確かに京大山岳部への入部者数は減っている。これは全国的傾向のようだが、ある大学では、山岳部が成り立たなくなり、休部をしているところさえあるという。

第二図に、京大山岳部への入部者数（初期の数字で、その後の退部者数などを引いてない）の推移を表す。

これは、新人の山岳部への入部者数の変化である。途中退部や遭難死亡などで部員数は変化するが、とにかく、新入部員数は年とともに減少している。この傾向は、日本の各大

学同じような傾向にあり、理由として、『若者全体が、登山のような苦勞を伴うような生き方をしなくても、もっと安易な道がいくらでもあるので、そうした安易な道を選ぶようになった：』とか『社会情勢がそうになってきた：』という論議でみな理解し、納得している。

こうした（社会情勢の変化：：などといういいわけ）論議を『雪崩不可抗力論』と呼ぶ。冬山では、しばしば雪崩のために遭難することがある。そうした時、『雪崩の予見は不可抗力である。よって、この遭難は不可抗



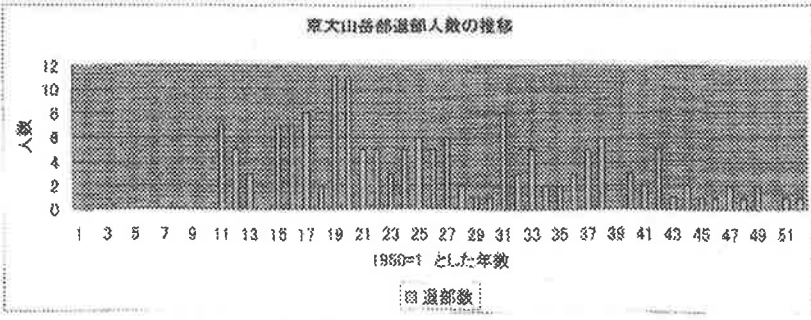
第2図 京大山岳部入部部員数（退部数や遭難死亡数は引いていない）の変化

力である……』という議論に似ているからだ。

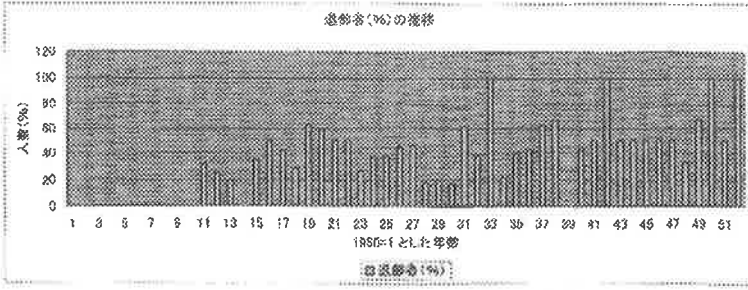
これについての議論は、最後の結語のところまで待とう。

実際の部員数は、途中退部者、遭難で死亡する者の数で変化する。だから、実際に山岳部を卒業する部員数（AACK入会が可能な山岳部員数）は少し異なる。

在学中の遭難者の数はそう数が多い訳で



第3図 途中退部者の数の推移  
11年目（1960）から突然現れ、毎年数名を越すようになる。



第4図 退部者の割合を%で表したもの

もないので省くが、中途退部者数の推移をみてみよう（第三図）。

途中退部者は、戦後の部の再建年度（一九四六年）以来、十四・五年間は出なかったが、横軸の十一年目（一九六〇）に突然七人の退部者を出し、以来、毎年数人の退部者を出し続けてきた。十九年、二十年目（一九六八、一九六九）には退部者数はピークに達して、十一人の退部者を出したが、同時に新入部員数は十九名もいたので、五名や八名が最後の四回生まで残ったことになった。

退部者は、入部者の多い間（二十八年（一九七七）頃までは影響は少なかったが、入部者数が減少してくる頃になると目立つようになってくる。

例えば、三十三年（一九八二）には退部者は五名であるが、その年の入部者は五名であるので、その学年全員が退部して部員ゼロというような異常なことが起こった。一体何ごとが起こったのだろうか。

全員退部は、四十二年（一九九一年）にも起こり、この時も、新入部員が五名であるのに全員が退部したので、この学年の部員ゼロとなっている。退部者が四十二年頃（一九

九二）以後に、一見毎年少ないのは、入部者そのものが少ないからである。少ない部員の中から退部者ができるので、その中からのAACK入会者が更に少なくなるのである。現役の時に退部しても、後にAACKに入会して活躍している人も数人いるが、全体の傾向には影響ない。

このことをもっと明瞭にするために、退部者数を、その学年の部員数で割ったもの（%）で表したものが、次の第四図である。

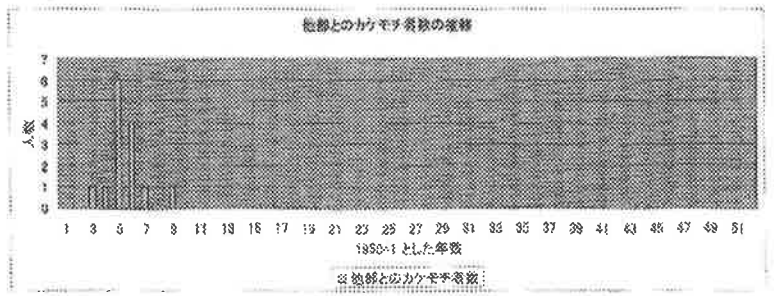
退部者の出現した十一年目（一九六〇）には、退部者が七名も出たのに、二十二名の新入部員がいたので、割合は三十二%となっている。逆に、四十一年（一九九〇）以後は、新入部員が減っているので、退部者の割合は大きくなり、五十%とか百%という年が目立つようになる。

#### 四 山岳部以外（探検部、スキー部）の部に属した部員数の推移（第五図）

面白いのは、他部とのかけもちの人数である。これを第五図に示すが、他部とのかけちは初期（一九五〇年代）に集中している。これは、その頃、探検部が創設され、山岳部員が移動したためもある、と思われるが、これについては、のちに議論しよう。

#### 五 結語と議論（どうすべきか）

（一）異種を排除すべきでない……雑草の強さ  
どんなものでも、純粹種というのは脆弱なものである。AACKや山岳部の構成員



第5図 他との部とのカケモチの部員数の推移

ACCKや山岳部は他の会の構成員を排除すべきではない、ということである。思いがけない時に、雑種の強さがあらわれるものであるからである。

第五図を見ていただきたい。一九五〇年代のはじめには、山岳部には、他部と掛け持つ山岳部員がいた。ちょうどその頃に京大探検部が創部され、山岳部から何人かの人がかケモチになったので、そういう結果になったのかもしれないが、その後、ゼロであることが気になる。

は雑種の方がよい。その意味で、ACCKもいろいろな人から構成されている方がよい。山岳部も同様である。もちろん、他部とかけて、一つ一つの部に対する活動がおろそかになっても困るが、それは、その人のエネルギーが関係するので、一概になんとも言えない。少なくとも、A

(二) 退部者の出現……人格は山岳部によって形成されるような部であって欲しい

戦後の山岳部再建以後、初期は退部者がゼロであったのに、一九六〇年ころから退部者が出はじめた(第三図)。その原因は多種多様で、ここで原因をまとめて指摘することは出来ないが、私自身(教授という立場でいえる言葉ではないが)、『私は京大山岳部を卒業した』、と声を大きくしていつている。考えると、今の私の人格は山岳部で形成されたようにおもえる。もし、山岳部に入っていないで、京大の研究室だけしか知らなかったとすると、私のその後の生き様は全然別であったように思う。

どこがどうか、ということとは出来ないが、登山の哲学、先輩後輩との接触、同級の友人との交友、どれをとっても、夜空の星のように遥か輝く。九大で、三十年間、学生に、どこかの部に入部せよ、と言いつづけていたゆえんである。

退部者は、こんな生活を自ら捨てている結果になる。しかし、これは、新入部者が暫減してきたごとく、何かが変化してきたので、その原因を指摘することは出来ないが、心に留めておくべきことである。

(三) 焦眉の急は、若者の確保である……  
『ACCKの夢』を探そう

最後に、一番大きな問題、ACCKの入会者数の暫減、ACCKの老化について議論しよう。この方が重要で、対策は焦眉の急を要

するものである。

第一図からわかるように、このままではACCKは自然消滅してしまう。旧制高等学校の同窓会を見よ。一番若い世代でも、現在は七十才をこす。こんな老化会は、回顧の場であつても、将来への夢などを語る場ではない。しばらくACCKを離れていた私には、ACCKの老化を感じることがより強い。ニュースレターの特集『ACCKのゆく道』の中の論文には、『ACCKの解散』論と『サロン化』説が出てくる。

若者は、『夢』を求める。我々が若い頃、そこには、ACCK初代の夢(登山哲学II初登頂)があつた。我々はそれに心酔し、その実行に邁進してきた。かくして、山岳部にACCKに飢狼(AACCKニュースレター#二十二、岩坪五郎、A2)が集まってきてACCKの黄金代を築いてきた。

『夢』の実現には、技術が要る。夢の実現への決意がその最初だが、これも一種の技術だ。登山技術以外に、その山の登山許可、外貨(現在は無いが)、募金、諸準備、どれを、いつ、どのように始めるかもノウハウの一つである。

どんな新しい事柄でも、その技術が続いている間は、それを更新することは、そう大変のこのことのように見えない。しかし、一旦その鎖が途絶えると、その再建に大変なエネルギーが要る。古代のピラミッドなど、未だにそれが作られた方法がわからない。

アンナプルナ、チョゴリザからはじまり、

ヒマラヤ遠征は回ごとに簡単になった。遠征技術が蓄積されていったからである。

しかし、A A C Kに若者が途絶え、この技術が一旦途絶えると、それを再開することは大変難しい。再びアンナプルナからの、あの努力が必要となる。何十年という歳月が必要である。それを思えば、今まで、遠征に費やしてきたエネルギーを、若者の確保に費やすべきだろうと思う。これは、A A C Kの総力を挙げるべきものである。しばらく、遠征などをやめて（どうせ、目ぼしい目標はなくなった）、A A C Kの総力を、若者の獲得にあげるのが、今、なすべきことではないか。若者が集まらず、A A C Kが自然消滅を余儀なくされれば、なんにもならないだろう。

では、A A C Kの若者を集めるにはどうすればよいのだろうか。この問題は、京大山岳部が新人を集めることと同じだから、同時に議論しよう。

まず、A A C K自体が『夢』をもつ、ことの一語に尽きる。『夢』のないところには若者は集まらない。今はシニアだが、ジュニアだった昔を思い出そう。私自身は、初登頂という夢があったから山岳部に参集した。多くの人の中には、単に高等ハイキングがしたいから、と参集する人もあるだろう。それでもよい。いろいろな若者がいてもよい（雑種の強さ）。

この際、三で触れた『雪崩不可抗力論』は正しくない』ことを強調したい。

最高の命題は、いかに『遭難』しないか、であり、そして『A A C Kの消滅』を避ける

ことである、と思う。

A A C Kの解散、老人サロニ化を認めるならは、コトは簡単である。このまま何もせずに、じっとしておればよい。『時』が自然にコトを運んでくれる。

雪崩を避けることは確かに困難であるが、難しいからといって『遭難』を甘んじるわけにはゆかない。『A A C Kの消滅』を肯定するわけにはゆかない。雪崩の科学を勉強して、『何』か夢を探して、努力して、何とかその困難を回避し、『遭難』を回避しなければならぬ。『A A C Kの自然消滅』を回避しなければならぬ。『A A C Kの老化』を、社会の大きな流れだとして、拱手してA A C Kの自然消滅をまつわけにはゆかない。それは、社会の大きな流れかも知れないが、かなわぬまでも努力してみようではないか。流れにあえて棹さしたい。

A A C Kも、その目的（パイオニア登山Ⅱ探検登山）を失い、いずれは消滅する運命にあるのかもしれない。が、それはまだ早い。今ではない。それは百年さきかも知れないが、少なくとも『今』ではない。それが、百年も将来のことであれば、それはその時の若者に方策を考えてもらおう、ということは許されるかも知れないが、しかし、今、A A C Kの消滅を防ぐ努力をすることは、現在の会員の、シニアもジュニアも共に、義務である。今の会員は初代（今西氏らはじめ……）の打ち立てた『夢』を食って、成長してきたのではないか。その『夢』がなくなつた今、A A C K

が自然消滅しないように努力すべきことは当然ではないか。

我々シニアも、『老人はへつこめ！』とすましているわけにはゆかず、『その努力は若者に任せておこう』と、平気な顔をしていられないではないか。

結論として、A A C Kは新人を獲得せねばならない。これは焦眉の急である。自然のままに放っておいてはならない。十年の遅れをとり戻さなくてはならない。

方法はいくらでもある。努力をしてもダメな場合もあるが、まず努力したい。A A C Kの最優先の課題にしたい。

最後に一言（ちよつと長いが）。

どのグループでも、若者が漸減していることは、日本全体の傾向であることは事実である。私の関係した九大山岳部でも、同志社山岳部でも若者は漸減している。同志社山岳部に至っては休部に追い込まれているとき々。

だが、私に言わせると、それらのグループは、若者の漸減を防ぐ努力をしているのだからかと疑う（あるいは努力が足りない）。私はこんなに強気なものには理由がある。こんなことを、こういう場で言うのはどうかと迷うが、この際、聞いてもらおう。

退職後、九州大学の新生入生に、数年間『未踏への憧れ』という講義をした。内容は主として探検家の話である。何年に誰がどこを探検したか、というより、彼らが抱いた『知的好奇心』とは何か、とか、それを解決するのに探検家はどうか考えたか、そして、どう行動

したか、を主として講じた。人間（探検家）の生き様に重点をおいた。京大アメフト部（ニューズレター#二十四、壁があつたら登ろう、北村泰二）の話も出したし、考古学のシュリーマンの話も出した。ナンセン（北極探検）やスコット（南極探検）の話を出したことは勿論である。探検の話など、一般学生には不向きで、はじめは、探検部か山岳部の数人の受講を想像していたが、希望者は意外におおく、三十人をこす受講者が集まった。

定員二十人そこそこの少人数教育であつたので、その選択に苦労した。一通りの講義が終わつたころ、受講者はこぞつて『これでゆく道がはつきりした』とか『目標がつかめた』といった。

私は結論した。彼らは迷っている。ストレイシープ（迷える子羊）だ。昔と違って、自力で目標を見つけることが出来ないだけだ。数は少なくなつても、九大入学者の十人や二十人は、そうしたものを求めている。それを拾い集めよう。彼らの『夢』を見つける、そして『目標』を見つけての手助けをしよう。

それには、集まってくる学生の中だけに、そんな『夢』を持つている学生を見つけるのは困難である。サンプル数が少ない。もっと多い集団から、何かを求めている小数の学生をカキ集めるのは、それは宣伝の力である。それしかない。勿論、新入生を集めるのは、現役山岳部の領域である。AA CKは、お手伝いする、という立場を忘れ

るわけにはゆかない。

AA CKの当面の目標は、AA CK新入会員を、現役の中から一人でも多く獲得することである。その努力をするべきである。

その一つの方法は、異世代との接触である。私自身、南極で一年間、西堀さんはじめ、多くの異世代の人たちと接触し、また、九大での学生諸子との接触でこの結論を確信した。

重ねて言うが、宣伝するためには、AA CK自身が『夢』をもたねばならない。初登頂という夢は、三十年つづいた。いや、AA CK創設から数えると五十年間続いた（その後も遠征がいろいろ出ているが、私のように遠方から見ていると、それらはヤルンカンほどの熱気は感じられない）。

初登頂の夢をAA CKの第一期の『夢』とすれば、第二期の『夢』は、われわれに課せられた宿題である。今度は、我々が若い世代に『夢』を残す順番である。そして、こんど見る夢は、やはり五十年、いや百年つづかなければならない。

この目的で、『AA CKの夢』を語つてもらおうと、ニューズレターの特集を編集した。こんな場で恐縮だが、皆さんのアイデアなど、どんどん出していただきたい。出されなければ、アイデアはないものと考えざるを得ない。すでに唱えられている説でも構わない。それだけ、その説の支持者がいることが明らかになるからである。

『夢』のアイデア（Aシリーズ）は、今年

の十一月号をピークとして、以後は、記載の説の批判（Bシリーズ）に重点を移したいと思う。勿論、十一月号以後でもAシリーズを受け付けるので、どんどんAシリーズ、Bシリーズをだしていただきたい。

批判の出ない団体は必ず衰微する。

（上の意見に対する反論、またはAA CK一般に対する批判は、電話ファクス共用092-661-7309、または、yin20409@nifty.com（北村）まで）

## 言わせてくれエ——反論——

編集子より一言

批判や反論は、言いにくいものである。まして書きにくいものである。しかし、歴史をご覧戴きたい。批判や反論が出ない社会は必ず衰退している。人間の集団である社会に批判や反論がない筈はなく、その社会は、それらにより絶えず進路修正をして、結果として正しい進路をとることが出来るからである。団体も同じであることは私も何回も経験してきた。

批判反論は、批判者が、その対象をどうでも良いと考えたら出て来ないものである。それを、敢えて批判し反論するのは、その対象に愛着があるからである。自分の住む社会や団体を、よかれかしと思うからである。無関心のところに批判はない。だから



衰退する。

編集子も、会員諸氏にAACKに対して関心をもつて欲しいと願ひ、AACKニュース・レターは、そうした批判反論が自由に言える場であつて欲しいと希求し、ここに、あえて山口克氏と平井一正氏のそれぞれの言ひ分を載せる次第である。

## 「カンペンチンとメイリーの発想について」

山口 克（工燃化 一九五二卒）

ニュース・レターの前号（#二十一号）の『AACKのゆく道』の項で平井が終わりに述べている問題点の所で、『AACKの連中は、要は知識不足で勉強していないから、何が問題か、何がおもしろいかわからないのである。カンペンチン峰もメイリーもAACKの中から発想されたものでないことがひとつの例証である。（カンペンチンは神戸大、メイリーは探検部）：』と述べているが、この点に関して、当時の担当責任者の一人として黙認するわけにはゆかないので、述べておきたい。

### 一. カンペンチン

AACKの公式報告書にも記述されているように、確かに神戸大から譲られたもの

である。但し、其処にいたるまでの経緯は、その報告書や斎藤清明がまとめた「ヒマラヤへの道」にも書かれているので、詳細は省くが、みんなでの大議論の末、ランタン・リを中国側からやることに決め、偵察隊まで出していたのに、ネパール側からの越境隊に登頂され、仕方なく、急遽、僕が平井に電話してカンペンチンをAACKに譲ってくれるよう依頼したもので、AACKとしては神戸大に頼むという感覚ではなく、平井は我々AACKの仲間であり、その仲間の企画していることは我々の企画の一部に近いと理解していたからである。若し、カンペンチンの発想が平井自信のものでなく、神戸大の他の人達の発想によるものであつたなら、平井は当然、毅然としてAACKの申し入れを拒否していたであろう。平井は京大山岳部・AACKで育ち、ヒマラヤ遠征の発想そのものにも多くの先輩達の影響を受けて成長してきているので、AACKの仲間であつて、神戸大の人という感覚はなかつた。僕はいまでもそう思っている。AACKが関係のない他大学に「山」を譲ってくれなどと依頼することが想像できるだろうか。自分の都合で、ある場合には神戸大の立場で、他の場合にはAACKの立場で、ものを言うなどという、ややこしいことはやめてもらいたい。当時の担当者達は僕を含めて決して平井に比べて知識不足ではなく、それなりの努力もしていたのであつて、平井がレターであのよう

に記述したのは、彼自身が神戸大の計画に手一杯で、当時のAACKの活動状況に無知であつたからである。

### 二. メイリー

「梅里雪山事故調査報告書」（一九九二年一月）の最初に記載されている「梅里雪山峰学術登山計画成立までの経緯」にあるように、AACKがメイリーを最初に計画したのは一九八〇年のことで、隊長は元AACK会長・四手井綱英（当時・京都府大学長）、学術部門は京大理学部岩槻氏、登山部門はAACKの山口が責任者となり、楽友会館で最初の会合があつた。学術部門には探検部OBの荻野が居たようだが、登山部門は山口が中心となつて、当時のAACK若手の牛田、幸島ら四五人らで具体的な計画をねり、幸島らが京大図書館で日中戦争中に日本軍が中国軍から取り上げた雲南地方の地図（約十万分の一？）を見付けてきたのをコピーし、それをもとに最高峰登頂の策をねつた記憶がある。その地図には梅里雪山などという中国名はなく、「カ・グループ」という名だつた。（後で、探検部長だつた高谷から、メイリーの事故調査委員会のときだつたか、あの地図は高谷がその存在を知つて図書館に購入するよう依頼したことを、聞いた）。また、キングドン・ウォードやロックの著書等もコピーして調べたのも当然である。

以上のように、メイリーの発想は全く探

検部とは関係なくAACKからできてきたものである。ただこの時の計画は、報告書にもあるように、時期尚早のため実現しなかった。その後の経緯は報告書に有る通りで、一九八八年に四手井、岩坪、吉田、倉智らが訪中のときに第二次日中合同登山として実行する方向で協議し、「備忘録」に調印。前年より探検部が主体となつて推進するとして検討を進めてきたが、主催を断念し、これをAACKに依頼したわけである。

この場合も、平井はAACKの当時の状況にも無知であるに拘らず、レターに「…知識不足で不勉強…」などと書いているのは、当時の実動の担当者に対して、あまりにも礼を失するものであり、当然この誌上で謝罪すべきである。

二十年も三十年も前の話を今の時期にもちだして、しかもピント外れの批判をするなどは、一寸、精神状態が錯乱していたのではなからうか。

### 三、「ビデオ批判へのコメント」に対して

本論とは関係ないが、山口の行なつた批判の内容は、平井の云う誤解ではないので、是非とも述べておきたい。

「AACKのことを知らない外部のファンが作成したとしか思えない」と書いたのは、北村ではなく、僕である。何の反省もない、外部への見栄だけを強調した映像史を批判しているのであつて、礼を失しているのではない。

また、『ヤルンカンやメイリーの取り扱い』のところ、遭難事故の取り扱いに、外見を気にしたり、考え方によつて変えたりしてよいものだろうか。特にメイリーの事故は、ドイツ隊のナンガ・パールパートでのウエルツェンバツハ等の大事故に匹敵、乃至それ以上の前古未曾有のもので、恐らく登山史上、いつまでも語り継がれるものであろう。そのような隊を主催した杜団法人AACKの「公式映像史」のなかにこれを入れないで、殆ど省略してしまつたということは、法人としての社会的責任を全うしていると言えらうか。

また、『メイリーの映像は、プロが見て構成上入れられないという判断をした結果である』と記述しているが、この判断は誰がしたのか。平井が僕に、『メイリーの映像の存在は全然知らなかつた』と云つていたのは、全くの偽りで、本当は、平井自身、その存在を知つていて、そのように判断したのか？五十年余りの僕と平井との山仲間としての親しい付き合いのなかで、互いに云いたいことを云いあつてきたが、このように信頼を裏切られたことははじめてであり、恐らく、誰かに入れ知恵されたのであろうというふうに信じたい。

メイリーの日本側隊長の井上は、ヤルンカンで亡くなつた松田とは最も親しかつた後輩であり、しかも一緒にした遠征で彼を失つたこともあつて、山の事故対策（特に気象）には慎重で、ナムナニでは高い評価

を得ていたこともあつて、メイリーの最終拠点の根拠地で、「絶対安全に、登頂を成功させる：：」と切々に述べていたビデオの貴重な映像があるのに、それがどうして「映像史」のなかに入れられない、と判断したのか、僕には、その措置は全く理解できない。

### 四 AACK生存会員の年令分布経年変化

手元にあつた昔のAACKの名簿に基づいて、一九六一年～二〇〇一年の間の正会員の年令分布経年変化を調べた結果を以下に示す。

これらの数値は、僕が急いで拾ひ読みしたので、一～二%の誤差はあると思うが、凡その傾向はつかめる。これを見て今後のAACKをどのように考えてゆけばよいか、会員諸兄（とくに二十代～四十代）への宿題としておきたい。

五、おわりに  
広瀬に云われるまでもな

	1961年	1976年	1992年	2001年
70才以上(%)	0	8.7	16	26
60才代	3.5	13.3	19	32
50才代	20.0	22.5	29	20
40才代	24.4	23.7	18	17
30才代	28.6	25.3	15	4.6
20才代	23.5	6.5	3	0.4
平均年令(約)	40才	48.6才	54.4才	60.7才
生存会員数	234名	324名	318名	286名

く、「年寄はひっこんでおればよい」ので、これまではこのレターへの寄稿をいっさい断ってきたのだが、戦後AACKが再建されてから、四十余年間ズットAACKに密着してきた自分としては、誤った情報等については、性格上見過ごすことは出来ないもので、「ビデオ批判」もふくめて今回投稿したのであって、決して平井の個人攻撃をしているわけではない。

また、前回の投稿で、『タンケン』の『ケン』を『険』としていたのを岩坪から指摘されて気が付いたが、これは当然『険』のつもりであつたので、ここに訂正お詫びをしておきたい。僕のワープロでは、『タンケン』はいくら訂正しておいても『探険』とでてくるのに気がつかなかつたのである。

## 山口と平井のくされ縁

平井 一正（工電気 一九五四卒）

山口が私の文に反論を書いた（本号）。その反論を書けと編集者からの依頼があつた。山口は七六歳、私よりも六歳も年長で、しかもいまだに私が新人のときの感覚で接してくれるというありがたい先輩である。反論の反論は好きではないが、五十年余りにおよぶくされ縁で、失礼もあると思うが、気のついたところを遠慮なく書かせてもらう。

時間がすぎれば、皆昔から知っていたという感覚になるが、最初にだれがその山をみつけたのかということはあると記憶が薄れてくる。そういう意味を含めてコメントを書く。

### 一. カンペンチン

私ははじめて訪中したのは一九八〇年である。当時神戸大学として、クーラカンリかナムチャバルワを目標にしていたが、それらの許可をとるのは非常に困難であるとの判断から、許可のとれそうな山を研究した。当時許可されていたシシャパンマとこの同じ山群にカンペンチンという山があつた。同じ山群なら許可の可能性があるという感触から申請した。当時の山の許可を得る苦労は今では想像できないくらいきびしかったが、折衝の結果許可を得た。八一年の春である。当時カンペンチンという名を知っている者は少なかった。私は中国登山協会発行の本からその名をみつけた。

当時AACKはランタンリをネパールからやるという方針であつた。横山らが推進していた。しかし八一年私が訪中したとき、CMA幹部との話で、ランタンリを中国側から許可するということを知ってこれを京都に電話した。「みんなでの大議論の末、ランタン・リを中国側からやることに決め、偵察隊まで出していたのに、ネパール側からの越境隊に登頂され」（カギ括弧内は山口の文から）、AACKは途方にくれる。それ

で「仕方なく、急遽、僕が平井に電話してカンペンチンをAACKに譲ってくれるよう依頼したもの」という話になる。他に適当な山がなかったかもしれないが、AACKは他の代替案はなかったのか。それが私のいう研究不足につながるのである。

「AACKとしては神戸大に頼むという感覚ではなく、平井は我々AACKの仲間であり、その仲間の企画していることは我々の企画の一部に近いと理解していたからである」。私はこれを読んでいささか愕然とした。会員が他山岳会にも属し、そこで企画した計画は「AACKの企画の一部に近いと理解」してもいいものであろうか。（山口の云わんとすることが精神的なものを指していることを希望する）

「若し、カンペンチンの発想が平井自身のものでなく、神戸大の他の人達の発想によるものであつたなら、平井は当然、毅然としてAACKの申し入れを拒否していたであらう」。誤解がある。神戸大は八三年の許可を得ていたが、八二年は取っていないかつた。それは八十年にカラコルムの口ロフオンド氷河で遭難事件があり、八二年は遠征を出せる態勢ではなかったからである。AACKからの八二年の申し出は近藤会長からあつたが、オープンになつて八二年の権利まで主張するにはむりがあつた。八三年の申し入れであれば、たとえAACKであつても断固拒否したであらう。発想がだれであるかという問題ではない。神戸大

は、人材豊富なAACKとはちがって、遠征を出すのも一からくみたてていかねばならず、そういう苦勞はAACKでは多分わからないであろう。せっかく作った建物を強大なブルトラーザーで押しつぶされたという感を拭えなかった。(その悔しさを武器に私は後年クーラカンリの許可をとった。何が幸いするかわからないものである)

私の解釈では、先に述べたように、たままたあいていた八二年の登山を「山をゆずれ」という感覚でなく、仁義を切ってくれたものと思っている。カンペンチンという山を見つけてきて、その許可をとる努力をした私―神戸大への礼儀であろう。これは中国側もよく理解していて、京大に八二年の許可をおろすがいいかと、CMAの許競さんがわざわざ北京から神戸に電話で尋ねられたほどである。

「当時の担当者達は僕を含めて決して平井に比べて知識不足ではなく、それなりの努力もしていた」ことは十分認めるが、ランタンリを計画していた段階ではカンペンチンの存在を知らなかったと言えるだろう。ランタンリを中国側からという発想も多分なかったのではないか。(ただ昔の話なので、いや知っていたという人は必ず出てくることは想像に難くない)。

「平井がレターであるように記述したのは、彼自身が神戸大の計画に手一杯で、当時のAACKの活動状況に無知であったからである」なら、何で私が北京から、ラン

タンリを中国側から登ったらどうかと電話するだろうか。私なりに情報はつかんではないつもりである。

(因みに八八年に神戸大が武漢地質大学と合同で初登頂した雀兒山(チェルーション)も山を勉強していた結果探し当てた山である。)

## 二. メイリ

メイリに関しては、一九八〇年にその起源があり、探検部と関係なくAACKから出てきたということは、山口の書いているとおりであろう。誤解があったことをお詫びする。しかし「カ・グループ」(カワカブ?)という名であるうと、八十年という時代から、写真、資料もなく、山をみつけたという感覚からは遠かったと思う。おもしろい山をみつけ、そこに登ろうと人に働きかけるためには、それがどれほどいい山かを、写真なり資料なりで人に訴えなくてはならない。しかもAACKの次の目標はナムナニと七九年には決まっていた(「ヒマラヤへの道」参照)そういう状況のもとでは八年の雲南計画で生まれたメイリは影のうすい存在であったと想像される。入境の困難さもあり、長い間記憶の中でメイリは休眠していたと思える。しかし八五年に探検部と九州青蔵高原登山研究会合同のグラタンドン遠征の帰りに、関係者が交渉して、八年の許可を取った。ナムナニ成功が同じ八五年であるので、もし八十年当時のメイ

リの印象が強烈であれば、休眠中も写真や資料収集などをして情熱をもちやしておくべきであった。これも研究不足につながると言ってもいいだろう。

「二十年も三十年も前の話を今の時期にもちだして、しかもピント外れの批判をするなどとは、一寸、精神状態が錯乱していたのではなからうか」。ニュースレターをよく読んでほしい。例をあげたのがたまたま昔の話であったが、決して当事者を非難しているのではなく、言いたいのは会員がもっと研究してあたらしいところ、魅力あるところをみつめてほしい、そのために勉強してほしいと言っているのである。

## 三. 「ビデオ批判へのコメント」に対して

ビデオに関しては個人的見解も入り、流れと上映時間などの制約条件などすべてに関するので、コメントは差し控える。ただしひとつ以下の点だけは明らかにしておきたい。

「メイリの映像は、プロが見て構成上入れられないという判断をした結果である」と記述しているが、この判断は誰がしたのか。平井が僕に、『メイリの映像の存在は全然知らなかった』と云っていたのは、全くの偽りで、本当は、平井自身、その存在を知っていて、そのように判断したのか? (中略) このように信頼を裏切られたことははじめてであり、恐らく、誰かに入れ知恵されたのであろうというふうに信じたい。」私はメイリの映像(山口編)の存在は本当

に知らなかった。その内容に記憶がなかった。だから倉庫にあったメイリと書いてあったビデオを、製作関係者に渡したときにも、それが山口編集のものとは思わず、それ以前の隊がとったものと思った。そういうことで決して偽りを言ったとか、誰かに入れ知恵されたとかということではない。いろいろな条件から「判断した」のはプロである。もちろん私ではない。

山口には私が新人の日以来、山だけでなく日常生活まで、すべてお世話になっており、脇坂とならんで今日の私をあらしめた育ての親である。そういう先輩の信頼を裏切るようなことをするはずがないことを理解してほしい。

昭和生まれが大正生まれの六年も先輩に、こういう辛口の議論ができるのはAACKのいいところである。さきのニュースレターをよんで、そういう雰囲気をうらやましがっていた他山岳会の人が出たことを付記する。

## 〔臨時特集〕内外山行紀行文 その1

### 編集室よりお断り

本号には、『グリーンランド紀行（北村泰一）』『東ネパール・アルン川流域訪問記（今井一郎）』『アコンカグア東面からの登頂記（睦好正治）』『ケニア山調査・登頂記（安仁屋政武）』『南アルプスとその山小屋新事情（饗庭邦光）』をも掲載する予定であった

たが、紙数の関係で、次十一月号に回さざるを得なくなった。事情を述べて、著者にお詫びする次第である。

## クリチエフスカヤ紀行

### 岩瀬時郎氏に捧さぐ

曾根原 恵夫（工電氣 一九六〇卒）

最初に『カムチャッカへ行こう。』と云い出したのは、岩瀬時郎さんだった。恒例になった小田急参宮橋に近い、新日鉄代々木クラブで、実施される、AACK及び笹ヶ峰会（首都圏）の新年会で、彼はクリチエフスカヤ山の写真を含む、何枚かのカムチャッカの風景のコピーを配布しながら、熱っぽく周辺の仲間たちに語りかけた。あれは三年前の一九九九年正月のことだ。

それから一年が過ぎ、一昨年（二〇〇〇年）も同じような誘いが繰り返された。この時には、カムチャッカ最高峰としてもクリチエフスカヤ山（四六八八メートル）を狙うことが明確になり、私をはじめ本多、沖津などが興味を示した。当初の費用概算、見積りは、ヘリコプターを使うかどうか、使用するとすると、参加人員の多少によって大幅に変動するというもので、最低十名の参加が条件で、五十万弱であった。

計画は岩瀬夫妻がアトラストレック社早

川晃生氏と出逢ったことで、一気に具体化し、出発は二〇〇一年七月二十九日。期間は十五日間。その前に台湾最高峰玉山ツアーで三千メートル超の高所での宿泊経験をすることとなった。

以下、私のフィールドノートの記録をもとに忘れられぬ旅の思い出として、二月九日急逝された岩瀬さんに捧げる。

七月二十九日。新潟空港集合午前十時。前夜から待機していた、藤本栄之助、岩瀬時郎・志津子夫妻。当日東京から上越新幹線で到着した、本多勝一、沖津文雄、古瀬駿介及び私で七名。それにアトラスからツアーリーダーとして早川氏が同行する。搭乗手続、出国手続、手荷物検査などはJALが代行しているので、別段問題はない。ほぼ定時テイク・オフ。一時間三十分でウラジオストックに到着。時差はプラス二時間。入国審査はカード記入と外貨申告がややこしいが、英語で間に合う。保安チェックがあったが、パスポートにスタンプを押すだけ。荷物を受け取って国内線窓口で再手続き。一人二十キロの荷物の重量チェックが厳しく、グループ一括でチェックインした結果、若干の追加料金支払いが必要だった。十七時、待合室に入る。日曜日のせいか売店も開いてない。十八時、離陸。滑走路の傍らにはシラカバ・ポプラ・ヤナギなどが多く、草地にはオミナエシの黄色が一面に広がって緑輝く北の大地という感慨であった。二十時四十分。夕闇の中に、クリヤー

ク(カリヤークスカヤ)山(三四五六メートル)、アパチャ(アバチンスカヤ)山(二七四一メートル)を見ながらエリザボにあるペトロパブロフスク・カムチャッキー空港に着陸。ここで又時差プラス二時間。マイクロバスに揺られて、殆んど真つ暗な道路を約一時間。目的の州都ペトロパブロフスク市内に到着。カジノのネオンがきらびやかに点滅するアパチャ・ホテルに泊る。零時過ぎだがカニサラダを前菜とし、魚スープ、ポーク&マッシュポテトの食事をウオッカを飲みながら楽しんで、それぞれが部屋に引き揚げたのは午前一時を廻っていた。

七月三十日。六時三十分起床、熱いシャワーを浴び九時の朝食まで、散歩に出る。裏山はテレビ塔が頂上にある小山で、ノコギリソウ、フウロソウ、ヤナギランなど北海道で見慣れた草花にまじって、ピンクのハマナスが目立った。朝食後は民族博物館見学。

午後はバザールでイクラ、スモーク・サーモン、ウオッカなど買物を楽しんだ。一日たっぶりの買物休日の最後はテレビ塔の山頂への遠足だった。オニシモツケ、クルマユリ、エゾツツジなどの高山植物が、今を盛りと咲き誇っていた。十七時より十八時までスケジュール打合せ。十九時まで古瀬バーでカムチャッカの味を、二十時夕食。カニサラダ、サケフライ、オリーブ、トマト等、美味。

七月三十一日。五時起床。窓の外には一

面の霧が流れる。七時朝食。八時チェックアウト。八時四十分、十二人乗りのバンで出発。別のトラック一台にテント、トランクなどを積み、ガイド三名が同乗して後発する。郊外に出る手前で、登山ベースとなるエッソ地方に旅行するための許可取得手続きの為、五分ほど停車。十時ソコチで小休。天候は急速に回復し、日ざしが暑く感じる。峠を越えると、一路北へ、カムチャッカ川の広々とした谷に従ってどこまでも走る。十三時十分ミリコポで昼食。ちゃんとした食堂のある街。この間三百キロ、全く人家を見なかった。ダウリアカラマツ、トドマツなど針葉樹が出現する。殆どはシラカバとポプラの単調な原生林の中を一本道が何キロもまっすぐに続く。ダートだから、ときたま対向車があると、もうもうと土煙が舞い上がって大変だ。

百五十キロ地点で左折、エッソ入口。ピストロ川を二回渡る。分岐より二六キロ地点、川岸の休憩所。ハイマツ、ハイネズがシラカバの林床に出現し、地表にはブルーベリーの青い実が。エッソまではあと四三キロ。十八時、河岸段丘の上にある民宿に到着。ジャガイモなどの農園を持ち、木柵に囲まれた牧草地の中に木造二階建新築コテージである。トラック隊も一時間後には、ほこりだらけになって到着。十九時三十分、ボルシチ、ハンバーグで夕食。ひきつづき、今後のスケジュールにつき、現地側提案(魚釣り、ラフティング、先住民との懇談会

等)を検討したが、最終的にはクリチェフスカヤ登山の様子をみてからということ、結論は保留された。

八月一日。六時、にわとりの鳴声に目覚める。外はまだ明けやらす、朝日が出たのは七時。快晴。生トマト、焼飯、ローストチキン、ピクルス、コーヒー・紅茶。たっぶりの朝食をすませ、九時に満載のトラックに全員つめ込んで出発、二十分程でヘリポート到着。何の変哲もない草原にズングリ胴体のヘリコプターが駐機している。気をつけて見ると、かなり大きなタンクローリー型の容器が片側の脚に取り付けられている。補助の燃料タンクで、一気にC一予定地だった、カーミン山(四五七九メートル)とクリチェフスカヤ山との鞍部(三二五〇メートル)まで飛ぶのに不可欠らしい。十時三五分。轟音の中離陸。草原がゆつくりと沈んでいった。対岸の稜線をかすめるように飛んで、昨日車で走ったカムチャッカ川下流部にぶく光るのを一気に飛び越えてゆく。下は針葉樹の原生林がつづき、その間を溪流が曲がりくねる。次第に雪山が近づき、眼下は氷河モレーンのように泥色で、樹木はすでない。十一時二十分、アルプ状の平地に着陸。中継地点(約一八〇〇メートル)近くに避難小屋がひとつぽつんとある。ここで補助タンクを外し、通訳と日本人だけ残り、まずコルまで荷物とガイドが飛んだ。アルプは夏の花ざかり、エゾリリソウ、エゾハクサンイチゲ、ヨツ

バシオガマ、等々、およそ四十種の採集をした。十三時五分第二陣スタート。二五分ほどでコル着。雪解けがひどく、水がたまって深さ二十センチほどシャーベット状になっている。ヘリのローターは回転したまま、我々を下ろすとすぐに谷筋に消えていった。近くの露岩上にデポしてあった荷物を、全員で荷揚げして、直ちにC1設営にかかる。雪溪にはさまれた縦長の、火山岩の堆積した斜面上部に日本人用のテント三張、下方にガイド用二張と炊事用一張。三時間ほどで完成。No.1には本多・沖津、No.2には岩瀬夫妻・早川、No.3には古瀬・藤本・曾根原が入り、携行食で軽い昼食とし、夕食は二〇時となった。献立はソーセージ、マッシュウドン、黒パン、トマト、キュウリ、紅茶。

八月二日。五時三十分起床。快便をすませぐつすり眠っている古瀬、藤本を起し、ラジュウスの試運転。久しぶりでメタの使い方をおぼれていてまごついたが、行動食として日本から持参した即席味噌汁などに舌鼓。九時、高度馴化もかねて、中間点(四千メートル)の岩峰をめざして出発。雪溪は傾斜もゆるく時々、融雪のため薄くなつて、ズボット足をとられる個所もあるが、しまつて歩きやすい。おそれていた落石は時折あるものの、危険を感じずようなものには出合わなかつた。十三時三十分予定の中間点コルより少し手前、三九五〇メートル地点で大休止。昼食後引き返す。一六時

C1に帰還。全員体調は良好のようだ。テント内では日本食に、バザールで買ってきたイクラとふりかけを使って三色丼を楽しんだ。コックからは野菜スープと生のパプリカとキュウリが届けられた。

八月三・四日。四時起床。外はまだ明けきらぬが快晴。いよいよ登高開始で気分が高揚する。五時三十分、朝食を軽くすませ、六時三十分出発。ところが、異変が続く。まず本多が昨夜一睡も出来なかつたとか、登高に自信がないので、中止し、テントで待機することになる。歩き出して、しばらくすると岩瀬が苦しうに立寄り、遅れ出す。朝食のインスタントラーメンが原因らしく、全部吐いてしまつて、体に力が入らないのだと。それでも昨日の到達点までは三時間三十分、一時間も早いペースである。中間点のコルまでは、雪溪が切れて岩くずの上を十五分程。黒パンサンド、レーズン、ジュース、その他行動食の一部を補足して、大休止。コルから左手の岩稜に沿つて急登する。ここからは岩くずの斜面をジグザグに登る。岩瀬はここで登高断念、コルで待っていた岩瀬夫人・早川氏とともに下山。一歩登れば、ズルッと半歩下がつてしまふ、始末におえない斜面が続く。十六時、ついに沖津・古瀬・藤本は登高を中止。曾根原ひとり頂上を目指す。振り返ればカーメン山(四五七九メートル)はすでに眼下、四六百メートルは過ぎたのだ。あと少し登れば、あのドーム状のコブを越えれば、頂

上が見える筈だ。左手に無気味に噴煙を上げている小ピークが次第に下になり、右手はるかに高かつた頂上稜線が近づく。十七時。目の前には、いたるところから白煙を噴きだして、H<sub>2</sub>S(硫化水素)の臭いが鼻をつく。五十メートルほどの硫黄ベルトの向うに山頂のピラミッドが見える。予定時間はすでに大幅に遅れている。ザックをおろし、一旦は頂上をあきらめても良いかと思つた。この時若いガイドのイゴリが近づいてきて、「あなたが中止するなら、我々だけで頂上に行つてくる。ここで待つていろ。」「冗談じゃない俺が引き返そうとしているのは、時間切れだと思つたからで、ここでガイドの頂上往復を待つだけの時間があるなら、俺も当然頂上まで行く。」結論はあつてなかつた。二人は急いだ。十七時五十分。もう高いところはなかつた。頂上は平坦な岩もない裸地であつた。大爆裂壁は、絶え間ない噴煙で見えない。おまけに雲が湧いて、火口壁沿いのピークがうすくじんでいる。しばらくして、チーフガイド・ニコライが登つてきた。三人で肩を抱き合い、イゴリのビデオで交代に登頂の喜びの姿を撮つた。あつという間に二五分も頂上にいたことになる。記念のために、頂上の小石を七コ集めてポケットに納める。十八時五十分。岩陰で待ちかねていた残留組に合流、一息いれて、さて下山という時。人頭大の落石が残留組のすぐうしろの岩にあたつて、その少し下に腰を下ろしていたイゴリをかすめ

た。私には何か黒いものが目の前を飛んだようにしか見えなかった。「落石だ。やられた」日本人の声があった。目の前のイゴリが突然前のめりに倒れた。ニコライが飛びつき抱きとめる。血は流れていないが、ニコライの呼びかけに反応がない。しばらくしてイゴリが目をあけた。何があったのかまだわかっていない。水を口に含ませる。吐かない。どうやら即死はまぬがれたようだ。だが頭の打撲は外からは判らないと聞いたことがある。口にあてたイゴリの指の間に白い歯が二コ、どこで歯を折ったんだろう。ようやく顔がゆるんだ。笑おうとしているが上手くゆかない。彼の荷物はニコライが背負い、ビデオは沖津がリュックに入れ、とにかく下山開始だ。落石事故のせい、慎重にガレを下るが、それでも足許からの岩なだれは頻発する。トップのニコライも神経をとがらせる。思わぬところに隠れ氷があり、足をとられて尻もちをつく。次第に暗くなる。二十一時ごろ、あたりはとつぷりと暮れ、おまけに中間点あたりから湧き上がる雲が次第に濃く、暗くなる。天候さえ好転すれば月明かりでも下山をつづけられるだろうが、そろそろビバークの覚悟をしなければ。ニコライがルートを左側の谷の方にとり、わずかに見える、踏みあとをたどるうちに、かなり急な谷のど真ん中にいる。気温が下がって、足許が凍り、滑りやすく、いかにも危険な状態だ。ニコライは下の方でルートか、ビバーク地を探し

ている。その時、最後尾にいた藤本が足を滑らせて仰向けのまま滑落した。「しまった。」と一瞬息が止まりそうなショックがあった。「大丈夫か。」と叫ぶ。「大丈夫です。」返事があった。良かったとホッと胸をなで下ろす。直後ビバークと決定。滑落地点から五十メートルほど下の、四角い大岩を中心に四人背中を合せて押しくらまんじゅう方式に空にしたザックを尻に敷いて座りこんだ。みぞれが粉雪になり、一時雪雲をとうして明るさを見せていた月もすっかり姿をかくし、夜の時間はなかなか進まない。眠りこまぬように声を掛け合い我慢する。二回ほど背筋から寒気がして、胸震いがきた。隣の沖津に頼んで、手袋の手でたたき、こすってもらおう。AM二時を廻ったのは確實。それからどれだけ経ったか、イゴリが起しにきた。C1から中間点まで救援が来るので、この谷から脱出して、中間点まで下りたい。脱出のためには、ニコライが大岩から五十メートルザイルをフィックスした。脱出には異存はない。直ちに全員準備にかかる。リュックに荷物をつめ、アイゼンをつける。ニコライの先導で、補助ザイルで結び合って一回一人づつ。フィックス上端は岩にまわしてしっかりと固定されていた。わずかな足場に腰を下ろして、次々にニコライに引っ張り上げられてくる仲間を待つ。目が慣れるとすぐ足許の岩や雪の状態はボンヤリと見える。積雪五センチといったところ。今は雪も殆んどやんだ。全員

が揃った。ニコライは左手トラバースにもザイルをフィックスする。五十メートルザイルで途中に支えるものがないので、このトラバースで足を滑らせると大きくふられるので慎重を要する。続いて、もう一回五十メートルのトラバースを無事終了。谷からの脱出は一段落。あたりは白々と明けて、中間点あたりの雲も切れ間が見える。たった五センチの積雪でもガレの斜面の様子は一変して、別の山にいるようだ。コル手前の岩稜下りにも、二回もザイルをフィックスして安全に下りる。コルもその下の岩溝も一杯に雪がたまつて、新雪の山を下がっているようだ。下の斜面に救援の二人が豆粒のように見える。八時五十分、早川氏と通訳ユージンが熱い紅茶とカロリーメイトで出迎えてくれた。十時、C1に着く。待ち構えていた本多・岩瀬夫妻が満面の笑みをうかべて握手する。「心配かけました。だけど登ってきたヨ。」私は嬉しかった。「私の気持ちです。受け取って下さい。」頂上の小石を岩瀬夫妻に差出した。十一時、古瀬・藤本・沖津も帰還。全員倒れるように眠る。八月五日。五時三十分起床。寒いのでラジュースを点火。古瀬は食欲なし、無理に日本茶を飲ませる。藤本も朝食の雑炊・スープを全部吐く。No.3テントは病棟のようだ。十時定時連絡、エッソの雲が厚く、ヘリ飛行不可。十二時ともかくヘリ飛来予定に合わせて、荷造り完了。テントの外で日向ぼっこ。雪花が舞い、マイナス三度。次第



に雲が湧き上がり鞍部をかくす。十三時まだ不可。ただしエッソの雨はやんだと。十五時も不可。十七時ラスト・トライしてみると。この頃から、鞍部の天候回復。ヘリの着地にはなんの不安もなさそうで、大いに期待はふくらむ。一七時折りも空しく本日は中止と決定。一八時ウラジオストクから来た若い二人にガイドの三人組が下山してきてテントを訪問。靴は山用だが非常に軽装。長いシラカバの杖と尻ザブトンが変っていた。彼らはおそらく十三、十四時間で頂上を往復したことになるが、雪の少ない時期のクリチエフスカヤ登山には、長い杖と雪すべりの尻ザブトンは最適かも知れない。七時三〇分、夕食。チキン野菜スープ、生トマト、黒パン、紅茶。昨日まで雪渓に埋めて保存してきた鮭の燻製とウイスキーでNo.1テントで四人だけの打上げパーティーをした。

八月六日。二時三十分、北極星、北斗七星、カシオペアが美しい澄み切った夜空。四時三十分金星輝く。六時、テント内が冷えるのでラジュースを点火。病人にホット・ミルクと日本茶。九時、朝食。ゆで卵、チーズ、コーヒ。十時よりテント撤収。ヘリ飛来に備えて鞍部まで運ぶ。十二時少し前、谷から爆音。ヘリの姿がみるみる大きくなる。目の前を飛びすぎ、カーメン山を廻るように方向を変えて風下から鞍部に着地する。すべての人と荷物をのみこんで、十二時離陸。十二時二十分給油のために街

道沿いの草地に降り、十三時四十分終了、十四時エッソのヘリポートに無事帰着した。十四時十五分民宿着。二十時より夕食兼帰還パーティー。地ワイン、日本酒、ガリリックトーストのトマト添え、鮭のコロッケ、マッシュポテト、キュウリ、生イチゴ等。二十一時から二十三時まで、病人二人を除く日本人だけで反省会。病人はペトロパブロフスクで入院させることに決定。

八月七日。四時三十分目覚め、十六夜月が中天にある。今日も良い天気だろう。五時三十分起床。七時三十分朝食。八時四十分病人二人は寝台型リムジンで、残りは往路と同じバンとトラックに分かれてエッソを出発。九時四十分川べりの休憩所。十時、本街道へ出ると、すぐにチェックポスト。銃を持った兵隊が中をのぞくだけ。十一時四十五分から一時間、ミリコボの同じ食堂で昼食。街を出てカムチャッカ川を渡った所に、ふたたびチェックポストがあった。十四時十分、原野の真ん中で小休。十五時十五分、左折してペトロパブロフスクへの舗装道路に入る。花いっぱい牧場が両側に広がる高原の街、ソコチは食堂、ビール・アイスクリームスタンドなどが並んで、車も多数停車し、お祭りのように騒がしかった。黒色の触角の長いカミキリが盛んに飛んで、それをスズメが捕まえていた。久しぶりの生ビールに生気を取り戻し、一路ホテル・アパチェに向う。十七時ホテルにチェックイン。小休してバザールに出かけ

たが、すでに殆んど閉まっていた。一キロ五百ルーブルで大きなタラバガニの足を買った沖津は大喜びで、夕食までパーティーをやっていた。私は採集した植物の措葉標本の整理で参加できなかったが、十九時三十分からの夕食にもタラバガニが前菜で出た。スープもワラビなど山菜が入り、鮭コロッケ、マッシュポテト、温室ミカン、コーヒート豪華なメニューだった。  
(注) 八月八日から一二日(帰国)まではペトロより南方へ『ムノトフスキー(二三三メートル) 探訪編』となります。

## 理事会決議録

### 【理事会決議録】

日 時 平成十四年三月二十四日(日)

午後一時～午後三時

場 所 京都市左京区田中関田町 京大

会館二一七号室

出席理事

上尾庄一郎、福寫義宏、横山宏太郎、松沢哲朗、松林公蔵、吹田啓一郎 以上六名

委任状によるもの

田中二郎、西山孝、上田豊、中川潔、人見五郎、山田和人、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、清水浩、牛田一成 以上十一名

欠席理事

なし

議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十四年度事業計画について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十四年度事業計画に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十四年度収支予算について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十四年度収支予算に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新入会員について

担当者より、下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

内山 敬康

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

【理事会決議録】

日 時 平成十四年五月二十六日（日）

午後一時～午後二時三十分

場 所 京都市左京区吉田河原町 京大

会館

出席理事 上尾庄一郎、西山孝、福富義宏、

松林公蔵、吹田啓一郎、竹田晋

也、山田和人 以上七名

委任状によるもの 田中二郎、上田豊、横

山宏太郎、松沢哲郎、中川潔、

人見五郎、高尾文雄、清水浩以

上八名

欠席理事 牛田一成 以上二名

議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十三年度事業報告について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十三年度事業報告について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十三年度収支決算について

理事竹田晋によって作成された平成十三年度収支決算について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新入会員について

担当者より、下記二名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

和田泰三、石根昌幸

第四号議案 知床山脈冬季縦走五十周年記念事業について

念事業について 会員中島道郎より知床山脈冬季縦走五十周年記念事業の運営に協力する件について提案があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第五号議案 小谷温泉高橋記念館創設事業

について

会員斎藤清明より小谷温泉高橋記念館創設事業に協力する件について提案があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

【総会決議録】

日 時 平成十四年五月二十六日（日）

午後三時～午後四時三十分

場 所 京都市左京区吉田河原町 京大

会館

会員総数 二八七名

出席者数 一八七名（うち委任状出席一六

一名）

議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）上尾庄一郎が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入る。

第一号議案 平成十三年度事業報告および

収支決算について

担当の者より平成十三年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成十四年度事業計画および

収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案 新入会員について

担当者より、下記三名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

内山敬康、和田泰三、石根昌幸

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三十分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

## お知らせ

### 登山探検文献センターの現状

編集子

正式名は、『国際登山探検文献センター』という。ここでは、略記して登山探検文献センターと呼ぶ。

これは、『チヨゴリザ』『ノシヤック』『サルトロカンリ』『ヤルンカン』、あわせて四座の初登頂がなしとげられたのを記念して、日本万国博覧協会の支援を得て、一九七四年に設立されたものである。

第一回図書カタログ（AACK時報臨時号、一九七四年三月）によると、初期の図書の保有数は、和書約千七百冊、洋書約三百三十冊、計約二千冊である。現在は、寄贈本を加えて、更に増している筈である。

これらの蔵書は、長年、京大構内のある建物に保存され閲覧に供されていたが、この度、京大当局から、建物の返還を要求されたので、現在は、とにかく撤去して落ち着く先を探している現状である。新聞の切り抜きは、今年の四月十八日の京都新聞の記事である（上尾庄一郎会長提供）。

現在は、過渡的処置として、京大図書館、京大博物館に分割保管され、鋭意整理中であるが、現在はまだ一般の閲覧にまでは至っていない（上尾庄一郎会長談）



### 西堀生誕百年記念事業について

編集子

昨年は、今西錦司氏生誕百年を記念してシンポジウムなどが行われたが、来年は西堀栄三郎氏生誕百年を記念して、記念事業を行うことが、近藤良夫氏によって五月のAACK総会に申し出られ、了承された。

滋賀県湖東町に探検の殿堂（正式名…西堀栄三郎記念、探検の殿堂）がある。西堀氏自身は京都生まれだが、西堀家が湖東町の出身であるからである。その探検の殿堂がやはり百年記念事業をおこなうので、AACKとしては、湖東町と緊密に連絡をとりつつ事業を行う予定である。その他に、大阪に西堀氏が関係した日本規格協会関西支部のモチベーション研究会（代表近藤良夫）がある。関東には、原子力関係のグループもあるし、その他のグループもある。これらのグループと、AACKとの関係の詳細はまだ決まっていない。（近藤良夫氏談）

### 南極ツアーのお知らせ

●二〇〇三年二月十二日出発、三月三日帰着

●チリ、サンチャゴまで空路、サンチャゴ

から南極半島までクルーズ、上陸。

●その地域は、シャクルトンのものすごい生き残り物語があるところである。

●費用約百万円。北村泰一添乗。サイエンス・探検の歴史ツアー

●詳細は、0924747556、朝日旅行センター、資料請求自由。

## 編集後記

●八月号は編集者の都合で遅くなった。加えるに、予定していた「臨時特集海外山行紀行」が、都合で今号と次号に分けることとなった。

海外登山も、かつての国内登山のように気軽にゆくようになった。何も、マナジリを決して行ったような海外登山でなくても、それは会員の活動を知らせることになる。各山行の紀行文の投稿を待ちます。

●ニュースレターの初期に比べて、編集方針が変化したのでお知らせする。編集者は、原稿に一切触れない。地図の文字の大きさなど注意して欲しい。初稿のみを筆者に返送する。

その際、訂正箇所はなるべく誤字程度とし、文章を訂正しないこと（どうしても訂正したい場合でも、字数を大幅に変化させないこと）。印刷業務に支障をきたす。

●十一月号は、「山の文化、文学、随筆」と

銘うって特集することになった。投稿を待つ。

●今期、編集者は、『AACKの今後の生きる道』を特集としてきたが、今号の山口克氏が、文の末尾の「四、AACK生存会員の年齢分布経年変化」で鳴らした「AACKの老人クラブ」化への警鐘、北村泰一の文「これでよいのかAACK」の図で明らかにされた、近頃の（実は大分以前から始まっていた）AACK若手のAACKへの魅力の喪失の事実などに、会員も本気でAACKの将来を考えて戴きたい。普通考えると、それは社会の一般的傾向だと考えるだろう。しかし、編集子は、我々の仲間には、『普通』ではない、と考えている。一般的には、『もう駄目』であっても、そこに活路を見出すのが「AACK」だと思っている。

このままでは、AACKに選択の道はない。AACKが『自然消滅』するか『老人クラブ』化するか、『社団法人AACK仲良し山登りクラブ』化か、『AACK健康山登りクラブ』化への道しかない。

他に道はあるだろうか。AACKがあと百年生きる探検登山哲学があるだろうか。ニュースレターではそれを求めている。どうか、そんな道を示していただきたい。

八十年ほど前、シャクルトンという南極探検家（英）がいた。彼は、南極ウエッデル海で、氷のために船が粉碎沈没したにもかかわらず、一五〇〇キロの南極の荒海を手漕ぎボートでのりきり、結果として四十

名の隊員を無事文明社会へ連れ帰った。普通なら、シャクルトン隊はウエッデル海で全滅していただろう。それが普通である。だが、シャクルトンは違っていた。AACKの中にシャクルトンの影を見つげようとするのは編集子だけであろうか。

●今期の編集者（北村泰一、上田豊、松林公蔵）の任期は二〇〇三年八月号でおわる。次期編集長を募る。自薦、他薦を編集者または吹田啓一郎までお寄せいただきたい。われわれとしては、エネルギーのあるより若い世代（北村は一九五四卒）が引き受けてくれることを願っている。

編集委員 北村泰一、上田豊、松林公蔵

発行日 二〇〇二年八月末日

発行所 京都大学学士山岳会

〒六二一〇〇二 宇治市五ヶ庄

京都大学防災研究所

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株) 土倉事務所